



# オープンラボラトリー

## OPEN LABORATORY

京都芸術大学舞台芸術研究センター

舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点

アニュアルレポート

VOL.12

2024 年度

# 遠隔通信技術を用いた《瀬戸内の離島》と《都市》同時上演による 地方課題の解決、および地方と都市の共創モデルの開発

EMMA | 演出家

瀬戸内の島嶼部は、過疎化や少子高齢化・空き家や耕作放棄地の増加・小中学校の閉校など、さまざまな社会課題を抱え「日本の未来の縮図」とも称される地域である。本研究は遠隔通信技術を活用した2拠点同時上演により、「都市部の劇場や観劇体験の新たな可能性」を探りながら、上記のような離島の問題を広く人々と共有し、創作チームや観客と共に全国の地方課題解決について考える場を創造することを目指した。

まずは離島のリサーチ・フィールドワークを行い、島側の会場を決定。次に脚本制作を開始し、会場間の調整・技術者との相談・稽古などを経て、12月に劇場実験公演を開催した。テレプレゼンスシステム「窓」を用いて香川県豊島にある元乳児院「ShinAiKan」と「京都芸術劇場 春秋座」を遠隔で繋ぎ、俳優と観客が交流できる環境下で2拠点同時上演を実施した。本稿は、9ヶ月に渡るプロジェクトの過程やその成果をまとめたものである。なお、公演は地域中核・特色ある研究大学強化促進事業 東京藝術大学(提案大学)香川大学(連携大学)『アートと科学技術による「心の豊かさ」を根幹としたイノベーション創出と地域に根差した課題解決の広域展開』との共催である。

## 研究の目的と背景

### 目的(1) 地方と都市の共創モデルの開発

瀬戸内の離島と京都の2拠点をテレプレゼンスシステム「窓」で接続し、地方と都市の別会場に居る「人と人」をつなげ、「空間の質や記憶」を交換することで、新たな共創の形を模索した。MUSVI株式会社の「窓」は、同じ空間にいるような自然なコミュニケーションを促す縦型ディスプレイと中央に配置されたカメラが特徴的な遠隔通信システムであり、医療、福祉、教育などさまざまな現場で活用されている。

### 目的(2) 地方課題の解決に向けた演劇的手法の活用と実践

演劇を通して離島が抱える課題を広く人々と共有し、創作チームや観客と共に全国の地方課題について考える場を創出する。「都市と離島の2拠点同時上演」という形式は、都市部の劇場の新たな活用法や、観劇体験そのものの可能性を広げようとする試みでもある。

また、地方課題の解決のために「離島」を調査し上演拠点とする理由は、離島に関する先行研究に“日本の縮図”であることを論述している事例研究等があり、他の地域や未来の日本の課題を解決するヒントになるのではないかと考えたからである。瀬戸内海の島々は、研究分担者である香川大学講師の小坂有資・柴田悠基が、既にフィールドワークやアートプロジェクトを通じて関係性を築いてきた地域もある。

## 研究のプロセス

### プロセス(1) フィールドワーク

#### ◆第1期(2024年4月)

調査地：瀬戸内海の島々(女木島、豊島、男木島、小豆島、伊吹島)、瀬戸内海歴史民族博物館

調査テーマ：こども、学校、祭り、地域おこし、離島の将来設計  
目的：離島ならではの地域課題の把握、地方の上演会場の選択  
内容：離島の自治会関係者や教員・地域課題に精通している島民等へのインタビュー、学校施設や資料館の見学など

### ◆第2期(2024年6月、10月)

調査地：豊島および「神愛館」関連施設  
調査テーマ：乳児院「豊島神愛館」の歴史や創設理念、離島における子育て、島の産業、産廃不法投棄場の見学など  
目的：離島側の上演会場となる豊島に関するリサーチ、公演準備  
内容：子育て現役世代へのインタビュー、保育関係者への聞き取り、いちご農園の作業体験、島のこどもたちとの交流

### プロセス(2) 脚本制作

本脚本が一般的な演劇公演に使用する脚本と異なる点として、本研究に課せられたミッションの多様さが挙げられる。離島と都市の人々を繋ぎ、離島の課題解決に向けたヒントが得られるような研究であること。加えて「窓」の機能を活用した同時上演であること。劇場を使用した実験的な試みであり、都市部の劇場「春秋座」と乳児院としての歴史を持つ「豊島神愛館の跡地」それぞれの会場の特性を活かした構成と展開であること。これら複数の目標を満たしながら、幅広い年代の観客が楽しめるような観客参加型演劇を目指して、創作メンバーで相談をしながら脚本制作が進められた。

主な創作メンバーは、出演者の石田迪子、岩崎聰子、大石将弘、小谷俊輔、演出補佐であり第2期のフィールドワークにも同行した櫻井拓見、構成と演出を務めるEMMAの6名である。

### プロセス(3) 演劇の創作と上演

創作メンバーで10~11月にプレ稽古(脚本内容のディスカッション)を6回、11~12月に脚本を使用した稽古を17回行った。稽古期間の後半期には、上演時に使用する「窓」と同じ型のものを東京藝術大学芸術未来研究場にて借用し、フロアを分けてそれぞれを「窓」で接続しながら見え方や聞こえ方を確認した。

創作メンバーは本番の6日前に豊島入りし、出演者はここで初めて豊島の会場となる「ShinAiKan(旧 豊島神愛館)」に足を踏み入れ、豊島側のコーディネータやバンド出演者、公演

を支える香川大学メンバーやTeshima GROWなど地域の方々と対面した。京都側の出演者2名は本番4日前に豊島から春秋座へ移動。テクニカルスタッフも加わり、合計4台の「窓」で双方の会場を繋ぎながら、公演の準備を進めた。「窓」には独自のノイズキャンセリング機能や明度の調節機能が備わっているため、音響・照明・舞台スタッフ・技術担当者で試行錯誤をしながらの準備となった。

公演は2024年12月22日に2度行われ、14:00の回の後には、ShinAiKan関連コーディネータでありバンド出演もした平井伸一氏と研究代表者・分担者の4名でアフタートークを行なった。

また、本プロジェクトが共同研究である旨を観客へ説明した上で調査票(アンケート)の収集を行なったところ、合計94枚(回収率78.9%)が集まり、自由回答欄にはそれぞれの会場で体験したことに対して、多様な意見が寄せられた。

## プロジェクトの総括

本研究は、遠隔地を繋ぐ新たな演劇体験の創出を目指して、多くの成果と今後の課題を明確にした。最も顕著な成果の一つは、世代間・地域間の交流が生まれたことである。この繋がりは、今後も大切に育んでいくべき資産であり、継続させるための工夫が必要である。観劇体験の新提案という点では、都市の劇場と地方の会場に居合わせた観客が「窓」を通じて出会い、物語や登場人物に関与するという新しい体験を創り出すことができた。異なる空間の独自性を演劇に取り込む試みは成功したものの、見せ方や技術的な問題、双方の会場の環境の違いにより、うまく共有できない場面もあったため、それらは今後の改善点として残った。

研究目的のひとつである「地域課題の解決を都市と地方の観客で共に考える」という趣旨は、期待通りには達成できなかったと評価している。これは、物語の内容やワークショップパート、両会場間の交流方法において、もう一步工夫が必要であった。今回、プロジェクトが掲げる目標や公演規模に対して、やや駆け足な進行であったことは否めない。数年かけて俳優やスタッフなどのチーム全体が交流し、両地域を行き来しながらより丁寧に創作を進めることができれば、さらに広く強固な活動へと発展させられるだろう。

## 劇場実験上演(公開)

### 《瀬戸内の離島》と《都市》同時上演『まどのむこうの子守唄』

日時：2024年12月22日(日)11:00～、14:00～

会場：[京都] 京都芸術劇場 春秋座

[豊島] ShinAiKan(旧 豊島神愛館) - 乳児院の建物を、島民の子育て世代がメインとなって島の文化拠点として再スタートさせた施設

合計観客数：119名(京都56名、豊島63名)

関連イベント：アフタートーク「離島の課題解決と芸術」平井伸一、小坂有資、柴田悠基、EMMA

公演情報：<https://k-pac.org/openlab/13689/>

出演：大石将弘、岩崎聰子、石田迪子、小谷俊輔、壇山日ノ出

制作スタッフ：[構成・演出] EMMA [演出補佐・制作] 櫻井拓見 [リサーチ・フィールドワーク監修] 小坂有資 [プロジェクト運営・システム構築] 柴田悠基 [豊島関連コーディネータ] 森島丈洋 [ShinAiKan関連コーディネータ] 平井伸一 [プロジェクト運営補佐・メインビジュアル撮影] 三谷なずな [香川大学スタッフ] 馬場夏希、眞野未央、川畑彩夏、高垣悠紀、林瑞稀、外村理穂、山崎樹乃 [チラシデザイン] 川越健太

京都上演スタッフ：[舞台監督] 横山朋也 [音響] 平井隆史 [照明] 川島玲子 [照明協力] 木内ひとみ、高木里桜 [システム構築] 永富太一

協力：社会福祉法人イエス団 神愛館、Teshima GROW、MUSVI株式会社、すやま農園、リサーチにあたり、豊島・女木島・男木島・小豆島・伊吹島にてインタビューにご協力いただいた皆さま

## 関連出版物

小坂有資・柴田悠基・EMMA・櫻井拓見「遠隔通信技術を用いた地方と都市同時上演による地方課題の解決に向けた参加型演劇の実践記録」『香川大学地域人材共創センター研究報告』第30号、香川大学地域人材共創センター、2025年、83-101頁。

URL：<https://kagawa-u.repo.nii.ac.jp/records/2000837> (香川大学学術情報リポジトリ)

## 研究組織

研究代表者：EMMA(演出家)／研究分担者：小坂有資(香川大学教育推進統合拠点大学教育基盤センター 特命講師)、柴田悠基(香川大学創造工学部 講師・芸術未来研究場せとうち 統括リーダー)／研究協力者：櫻井拓見(調布市せんがわ劇場 演劇ディレクター 演出家)



『まどのむこうの子守唄』上演時の様子(豊島側) 撮影：高垣悠紀



『まどのむこうの子守唄』上演時の様子(京都側) 撮影：川畑彩夏

# 映像と劇場—多層的幻想空間の探究 —プロジェクション・マッピングとパフォーマンス— ジョルジュ・メリエスを起点として

林ケイタ | 京都芸術大学大学院芸術環境専攻映像・メディアコンテンツ領域 教授

本研究は、映像投影の拡張的表現を劇場固有の舞台空間に対して行うプロジェクション・マッピングの試行として計画され、プロジェクション・マッピング先進国である韓国の研究者、映像アーティストと共同しながら、映画創成期に活躍したフランスのジョルジ・メリエス (Georges Méliès, 1861-1938) の映像・舞台に対する試行や実践を研究の起点とすることで、新たな劇場空間の創出が目指された。プロジェクトの過程は、新たな視点を獲得する<研究>、視察によって参考事例を確認・考察・議論する<調査>、研究から調査を通して導きだした視点にて制作コンセプトを設定、劇場実験に連結する<構想>、研究・調査・構想を通して導きだした劇場実験計画を実践・公開する<実験・研究発表>として課題と問題点を確認しつつ計画され、実行された。

## プロジェクトの背景

日本国内において、現在プロジェクション・マッピングと呼ばれる手法は、2012年、東京駅での実践を契機に一般に認知されたと言える。しかし、その起源は古く、映画スクリーンを三面並列上映した、アベル・ガンスの『ナポレオン』(1927年)を皮切りに、1960年代にはアメリカを中心に「エクスパンデッド・シネマ」という芸術動向によって多くの実践が試された歴史がある。同時に日本国内においてもプロジェクション・アートと呼ばれ、その先駆的な例も少なからず存在した。

しかし現在、一般的に認知されている「プロジェクション・マッピング」は、商業的サイネージとして、または、花火と同じく祝祭的イベントの演出として、エンターテインメントや消費を即す広告的ツールとして位置付けられることが多く、現代芸術表現として受容されることはあるが、現実芸術表現として受容されることはない。この研究では「プロジェクション・マッピング」という呼称によって定型化した一般的理解を払拭し、プロジェクション表現を映像と劇場、あるいは劇場空間の弁証法的な融合芸術として、改めて捉え直したい。それは同時に、映像と建築空間の既存の共存関係を、多角的に解釈し直す機会になるに違いない。

そして近年、韓国は商用利用されつつも現代芸術として優れたプロジェクション・マッピングの事例が多い。マッピング企業である「d'strict (ディストリクト)」など韓国内でのプロジェクション・マッピング実施件数は日本をはるかに凌ぎ、日本に比べて技術・表現レベルが高い。本研究では、韓国のキム・ウンギュやホ・ビョンチャンなど優秀な制作者を迎えることで、プロジェクション・マッピングの最新情報を確認、検討・議論することが可能となった。

さらに本研究は、メリエスの映像・舞台に対する試行や実践を起点に進行する。メリエスは、映像を自身の舞台表現に取り入れ、長編映画『月世界旅行』(1905年)を制作、新たな映像表現を切り開いた。舞台に精通したメリエスが如何にして映像メディアを捉え思考したかを、見直し再検討することは、劇場と映像の新たな関係を探求するために大きな示唆を与えてくれるに違いない。

## 各研究活動の報告

### 1. 研究会の成果

第2回研究会における東志保講師による講義「ジョルジ・メリエス映画の多面性：現実、幻想、劇場」により、メリエスが科学、文学など多様な領域や同時代の社会的出来事に関心を向けていたこと、それによりリュミエール兄弟=ドキュメンタリーの創始者、メリエス=フィクショナルな劇映画の創始者、という映画史における一般的理解を超えたメリエスの多面性が示された。そして具体的な制作に向けて、現実と幻想、映画空間と劇場空間が通底する「幻想的リアリズム」というキーワードが示された。

第3～4回研究会キム・ウンギュ講師による講義「韓国のメディアアート市場と産業化」とその後の実地調査により、インターナショナルなプロジェクション・マッピング企業とその挑戦的実践を観察し、国家規模の予算支援によって、都市のランドマーク、文化装置として注力されるスケール感を確認することができた。また、高価な高輝度プロジェクターが発展的な機材供給プロセスと普及促進法によって、制作者、アーティスト等に提供されている事実は、日本と異なり大変興味深かった。

### 2. 研究会の成果からプラン構築

研究会、調査を通じて以下の制作コンセプト、プランが導きだされた。

—メリエスが舞台や映画で追求した「トリック」は、映画メディアそのもののトリック性を明示する、と再解釈できる。  
—劇場空間=舞台=映画の撮影セットとなる。舞台上で実際に映画が撮影・編集・上映されるというタイムラインを構築する。  
—脚本は「幻想的リアリズム」というテーマのもと、メリエス(男性)と、その幻想(夢)に現れる人物(女性)による、夢と現実を曖昧化したノンバーバル・パフォーマンスとする。  
—劇場を覆うプロジェクション・マッピングは舞台の幻想的環境であり、同時に映画セット(ライティングと背景)の一部となる。  
—舞台と映画の相反する関係性を「トリック」という概念で併

存する 演劇、文学、美術、映画がボーダーレスに融合する夢の劇場として、メリエス映画の「真夜中のエピソード」-「Une nuit terrible(困った一夜)」をタイトルとして引用する。

### 3. 脚本から映像・舞台制作

研究分担者のキム・ウンギュによって脚本原案が作成された。登場人物は、女:シンシア(月の女神アルテミスの愛称)、男:メリエスと名付けられ、以下の物語構造が提案された。その後、日本側のプロジェクトメンバーによって舞台用に「序幕→夜の始まり→不安な眠り→夢からの目覚め→巨人との出会い→花の宮殿→月の下の冥道→夢幻の夜→編集→上映→終幕」の11幕として再構成された。

## 参考サイト

Google Arts&Culture ジョルジ・メリエス

<https://artsandculture.google.com/story/CQXRJW0P8DelIg?hl=ja>



## 第1回研究会

日時：2024年4月28日(日) 20:00 ~ 20:30

会場：オンライン (非公開)

参加者：林ケイタ、由良泰人、梅岡唯歩、横地由起子、西原多朱、キム・ウンギュ、ホ・ビョンチャン、ソン・ジフン

## 第2回 研究会(講義)

### 「ジョルジ・メリエス映画の多面性:現実、幻想、劇場」

日時：2024年6月5日(水) 15:30 ~ 17:30

会場：FRAME in VOX:京都三条の多目的スペースからオンライン (公開)

講師：東志保(大阪大学人文学研究科准教授)

参加者：林ケイタ、由良泰人、梅岡唯歩、横地由起子、西原多朱、キム・ウンギュ、ホ・ビョンチャン、ソン・ジフン、伊藤高志、二瓶見、堀内恵、新里直之、ホ・ウン、キム・ボヨン(通訳)  
一般参加者：3名

## 第3回研究会(講義)

### 「韓国のメディアアート市場と産業化」

日時：2024年7月30日(日) 15:30 ~ 17:30

会場：FRAME in VOX:京都三条の多目的スペースからオンライン (公開)

講師：キム・ウンギュ (VSLab研究所・所長)

参加者：林ケイタ、由良泰人、梅岡唯歩、横地由起子、西原多朱、ホ・ビョンチャン、ソン・ジフン、伊藤高志、二瓶見、堀内恵、新里直之、ホ・ウン、キム・ボヨン(通訳)  
一般参加者：1名

## 第4回研究会(国際調査・韓国)

日時：2024年8月6日(火) ~ 7日(水) 11:00 ~ 17:00

会場：VSLab: メディア・クリエイション・スペース (韓国・ソウル)

参加者：林ケイタ、由良泰人、梅岡唯歩、横地由起子、西原多朱、キム・ウンギュ、ホ・ビョンチャン、ソン・ジフン、二瓶見  
調査対象：re SOUND展(ディストリクト創立20周年展示)、ADER(ブティック)、GENTLE MONSTER(アイウェア)、DDP「AI FUSION展」(東大門デザインプラザ)、アラリオミュージアム 常設展

## 研究組織

研究代表者：林ケイタ(京都芸術大学大学院芸術環境専攻映像・メディアコンテンツ領域 教授)／研究分担者：由良泰人(大阪電気通信大学総合情報学部ゲーム＆メディア学科 教授、大阪電気通信大学大学院総合情報学研究科デジタルアート・アニメーション学専攻 教授)、キム・ウンギュ (VSLab研究所)、ホ・ビョンチャン(釜山大学 専任研究員)／研究協力者：梅岡唯歩(帝塚山学院大学)、二瓶見(京都女子大学)、伊藤高志(映像作家)、脇原大輔(株式会社デンキントボ)、横地由起子(株式会社プランニューディ)、西原多朱(tapetum works)、ソン・ジフン(映像作家)、堀内恵(コンテンポラリーダンス)、工藤由晶(京都大学)、ホ・ウン(京都芸術大学)、佐藤結花(育英館大学)、吳鴻(京都光華女子大学)、小笠原寛夫(滋賀短期大学)

# 現代アート的思考でメディアアートと演劇をマッチングする 観客主体型の劇空間の創作

岡田裕子 | 現代美術アーティスト・多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科 非常勤講師

現代美術家の岡田裕子と活動を共にしてきた研究チームで、技術開発から研究を重ねたXR(クロスリアリティ)作品『Celebrate for ME: okuru』を活用し、京都芸術劇場 春秋座において分野横断的な劇場空間を創作する劇場実験である。このXR作品は、自らが自分の「おくりびと」(納棺師の通称)になるという儀式的行為を、VRヘッドセットを使用し身体感覚を伴いながら体験ができるというもの。「死」という、万人が経験する事象をテーマに制作されたこのXR作品は、2023年12月、神保町のアートスペースでのイベント『Celebrate for ME - The first step』において初公開された。2024年度の本研究では劇場実験に至る研究過程を通じて、異なる技術的向上とともに、春秋座という劇場空間で展開するに相応しい新たな関連作を加え再構成した。全ての観客は、架空の葬儀を見立てた儀式的空間となる劇場全体を歩き回りながら会場各所で鑑賞ができる。ここでは3種の作品要素が同時に絡み合いながら、舞台上にいる演者と、観客の立場が時に逆転し、人が等しく体験する生と死においては誰もが主役であるというメッセージを含む場作りを目指した。

## 研究活動報告

劇場実験に至るまでに以下の研究活動を行い、段階的に、技術面のブラッシュアップと新たなアイデアの創出を行なった。

### 第1回研究会(調査)「Celebrate for ME 2024展トーキイベント」

日時：2024年5月11日(土)17:00～19:30  
会場：アートかピーフンか白扇(東京／六本木のアートギャラリー&レストラン)  
登壇者：岡田裕子、倉本大資、会田寅次郎  
一般参加者数：35名

岡田裕子個展「Celebrate for ME 2024」の会場にて、来場者に向けた講演会形式で行われた。チームが開発したXR作品の技術面にフォーカスし、発想から開発、実装までを語り合った。京都芸術劇場 春秋座での劇場実験の計画と進捗に触れ、オーディエンスとディスカッションを行った。

### 第2回研究会(現地リサーチ)

日時：2024年5月23日(木)～26日(日)  
会場：京都芸術劇場 春秋座、京都市内各所  
参加者：岡田裕子、柴田聰子、会田寅次郎、倉本大資  
非公開

春秋座の下見、劇場環境の確認。京都に拠点を置くアーティストサポート団体「HAPS」と面会し、劇場実験当日の技術者確保についての相談や、京都界隈のアートコミュニティについてリサーチ。他に、岡田は京都の神社仏閣をまわり、宗教儀式のコンテンツのアプローチを調査。建築やモニュメントなどの配置・動線などの工夫で、参拝者が境内各所を歩くことで参加意識を引き上げる効果に着目。本劇場実験の空間構成のヒントを得る。

### 第3回研究会(研究発表)「第29回バーチャルリアリティ学会 大会参加、口頭発表・ポスター発表」

日時：2024年9月11日(水)9:30～19:00、9月12日(木)9:30～20:00、9月13日(金)9:30～17:20  
会場：名城大学 天白キャンパス  
参加者：倉本大資、会田寅次郎、岡田裕子  
公開 一般参加者数：1000名

劇場実験の要となるXR作品『Celebrate for ME: okuru』について、ポスターと論文「『Celebrate for ME: okuru』：既

存 VR HMD の特徴を活かした作品制作」(共著：倉本大資、会田寅次郎、岡田裕子)を口頭発表。VR技術の専門家から、我々の技術は機器の選択などにおいて現時点での最適解であるという意見、センサーの誤認識への対策などのアドバイスを

### 第4回研究会(研究発表)

#### 「春秋座におけるXR作品デモンストレーション」

日時：2024年11月6日(水)10:00～18:00  
会場：京都芸術劇場 春秋座  
参加者：岡田裕子、柴田聰子、倉本大資、会田寅次郎  
非公開

実際の劇場空間において現状の技術の再現と確認、見直し。新しく招いた技術スタッフ永井歩・大井健司も参加した劇場実験の前段階として重要なプロセス。照明の暗さと、広がりセンサー認識にリスクがあるということをどう解消していくか、またソフト面の工夫すべき点についても意見交換の機会となり、バージョンアップの手掛かりとなった。有志の京都芸術大学学生も立ち会い、作品を体験しながらスキャナやVRゴーグルの使用方法などの理解を深めた。

ここまで的研究会を踏まえて「【研究ノート】Celebrate for ME — 自分が自分の「おくりびと」になる XR作品の創作と分野横断的芸術表現の実践」(共著：岡田裕子、会田寅次郎)を執筆。『京都芸術大学舞台芸術研究センター紀要 2024年度』に寄稿。

### 第5回研究会(劇場実験)「Celebrate for ME at Shunjuza」

日時：2025年2月22日(土)～2月23日(日)13:00～18:00  
会場：京都芸術劇場 春秋座  
参加者：岡田裕子、柴田聰子、倉本大資、会田寅次郎、伊藤弘子  
一般参加者数：22日：44名、23日：88名、計132名

劇場ではA・B・Cの観客参加型の作品要素が同居し、来場者はそれぞれを体験しながら劇場内を自由に歩き回れる構成とし、劇場全体が儀式的な体験空間を生み出すことを目指した。

### A:『Celebrate for ME: okuru』

XR作品の体験者はVRヘッドセットと等身大人形を用いて、

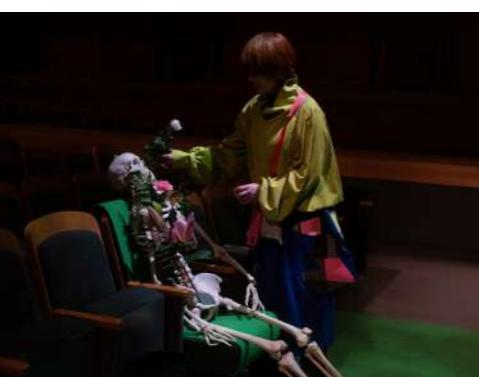
現実空間と重なる仮想の世界で自らが自分の「おくりびと」となる。当日現地でヘッズキャンから始め、準備完了後、花道から登場し、舞台上で来場者の見守る中、体験する。体験者の主要な行動は、自らの遺体に見立てた等身大の布人形に緑色の衣装を着せ、納棺することである。VRヘッドセットを通じた視覚上では、人形の頭部は体験者自身の顔にシンクロナイズしており、それが自分である感覚を得ることができる。この視覚映像は舞台上の大スクリーン上にリアルタイムに投影され、来場者がXR体験を共に感じる手立てとなる。来場者はスクリーンの裏側も歩くことができ、そこでは俯瞰カメラで常時撮影されている体験者の姿と、緑の衣装に自然風景がクロマキー合成される映像が上映された。これは舞台奥の松羽目と共に、死後の世界への道程を美しく厳かな印象で伝える役割を果たした。



『Celebrate for ME: okuru』 撮影：倉本大資

### B:『Celebrate for ME: ikeru』

舞台上の献花台に飾られた花を一輪手に取り、客席に設置された骸骨、それが自らの骨であるとイメージして花を活ける。



『Celebrate for ME: ikeru』 撮影：岩橋優花

### C:『Celebrate for ME: utau』

人生の最期に歌いたい、自分に捧げる1曲をカラオケで歌う。来場者に当日参加を募り、okuruの準備時間の合間に活用してutauを行った。歌う場所は2階席に設置し、歌い始めると客席の赤提灯が点滅し、舞台上のスクリーンに投影される海の風景が歌声に合わせてインラクティブに変化する仕掛け。京都在住のアーティスト、大井健司氏がこの映像を制作。



『Celebrate for ME: utau』 撮影：岩橋優花

当日は、A、Cのシステムを、3人の技術者(永井、大井、会田)が運行し、常時デバイス同士のデータの往還を支えた。舞台下手に彼らのデスクを置き、黒子のような役割を与えた。また、京都芸術大学の学生有志が、XR作品のスキャンやVRヘッドセットのセッティングと体験者へのナビゲーション、会場案内を行った。これらには細かいタイムテーブルと段取りを要したが、優れた連携をとることができた。

## 振り返りと今後の展望

### [来場者アンケート]

「VR技術の活用により、自分自身が主人公になれることに驚きと感心をおぼえました」「自分自身の死(葬式)を目の当たり(体験)することによって、死に対する恐れや不安が軽減されたように感じた」など。「ビジネスにできるのでは」という意見もあった。[今後の課題と展望]

技術者の献身的な協力で極めて安価に開発を行うことができたが、上演においてはコストパフォーマンスが見合わないという面もあり、今後展開するには大きな課題。また、XR体験以外にも一般来場者が鑑賞できることの周知は次の課題である。本番ではセンサーの誤作動が起こる場面があり、これから国内外のセンサー技術やアプリケーションの発展を注視しながら開発のアップデートを試みたい。また、「おくりびと」というセンシティブなテーマであるので、以後もコンプライアンスをどう守るかについて考える。2025年内に『Celebrate for ME at Shunjuza』記録集(電子書籍)の制作と配布を予定。

### 関連出版物

倉本大資・会田寅次郎・岡田裕子「Celebrate for ME : okuru : 既存 VR HMD の特徴を活かした作品制作」『日本バーチャルリアリティ学会大会論文集2024』日本バーチャルリアリティ学会、2024年。  
岡田裕子・会田寅次郎「【研究ノート】Celebrate for ME — 自分が自分の「おくりびと」になる XR作品の創作と分野横断的芸術表現の実践」『京都芸術大学舞台芸術研究センター紀要 2024年度』京都芸術大学舞台芸術研究センター、2025年、63-87頁。

### 研究組織

研究代表者：岡田裕子(現代美術アーティスト・多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科 非常勤講師)／研究分担者：柴田聰子(アートマネジメント)、倉本大資(東京大学大学院情報学環 特任研究員・OtOMO代表)、会田寅次郎(アーティスト)／研究協力者：伊藤弘子(デザイナー・HISUI代表)

# 支配的なイデオロギーへの対抗の場としての身体： ジェンダー・セクシュアリティの視点からの新たな文法創出

山崎恭子 | 演出家

本プロジェクトは、ジェンダー・セクシュアリティの視点から、二項対立によって生じる「抑圧」と「不可視化」の構造を明らかにし、支配的なイデオロギーに対抗する新たな文法の創出を目指すものである。また“ミソジニー”をキーワードに、ジェンダー表象のあり方を調査対象とし、舞台における「身体」が多様なアイデンティティの交差点として機能しうる可能性に着目した。またジェンダーをめぐる対立、非当事者の語りに潜む偏見や差別意識も自己分析の対象としつつ、個人の身体に内在する規範の脱構築を試みた。

リサーチは3つのフェーズを通して行った。①参考文献調査では、同志社大学大学院の学生を中心とした週一回の読書会に参加。また京都産業大学文化学部での藤高和輝氏（哲学者 京都産業大学准教授）の講義聴講を通してトランスジェンダーの語りを中心に調査。②講師を招いてのイベントでは、『ジェンダー目線の広告観察』（現代書館）の著者であり『ジェンダー・クィア』（サウザンブックス社）の翻訳者である小林美香氏、写真家の堀井ヒロツグ氏、青年団所属の俳優の和田華子氏、パトラー研究者で哲学者の藤高和輝氏の4名の講師を招き、レクチャーWS、トークイベント、勉強会等を開催。また前述の読書会の参加者数名とトランスジェンダー当事者の方々に協力頂き非公開での勉強会を開催した。③上演に向けての実践的な取り組みでは、リサーチを通して交流を深めたトランス当事者の方々にご協力頂き実践的なリサーチを行った。

## 研究の背景と目的

演劇史において、女性や性別二元論に当てはまらない人々は不可視化されてきた。例えば演劇教育現場では、学生の男女比は4:6であるのに、教授職では8:2と極端な偏りがある（表現の現場調査団、2022年）。また、トランスジェンダー、Xジェンダー、ノンバイナリーの人々は、調査自体が二元論的であるため、統計から排除されやすく、これは社会全体に存在する「当事者の不可視化」の一例である。こうした背景には、シス・ヘテロ男性中心的なイデオロギーがある。この構造は身体を二項対立で捉え、それに当てはまらない存在を不可視化する。身体を「らしさ」や「有用性」で評価し、研究代表者である筆者もこの価値観を内面化している。例えば、ぬいぐるみを持つ男性に違和感を覚えた経験がある。そこには、「幼稚さ」「女性的」「甘え」といった“価値の低い”イメージが「立場ある男性」と結びつくことへの無意識の苛立ちがあり、それは内面化されたミソジニーの表れでもある。

このような感情は、MtF（トランス女性）への差別に親和性が高い。MtFは「過剰に女性性を表現する」と見なされがちだが、それはジェンダー表現として選び取っている場合もあれば、性別変更の診断に必要な振る舞いとして社会から求められる場合もある。つまり、過剰な女性性はしばしば強制される一方で、差別の根拠にもなっている。この問題は一部の保守的な勢力の政治的資源にされており、トイレ使用をめぐる議論でMtFが危険視されることで、TERF（トランス排除的ラディカルフェミニスト）の言説に拍車がかかっている。外性器のみで性別を判断する主張は、問題を身体の一部に単純化して扱うものである。

こうした問題を当事者でない立場から語ることには、差別の再生産という危険があることに留意しつつ、本プロジェクトでは筆者が持つミソジニーに向き合い、自らの身体にMtFとTERFの対立を引き受けることで、支配的構造の可視化を試みている。

演劇における「身体」は、複数の属性が交差する場として機

能する。この特性を活かし、当事者／非当事者の境界や偏見を問いただし、支配的イデオロギーに対抗する新たな表現の文法を創出することが、本プロジェクトの目的である。

## 各研究活動の報告

### 第1回研究会 | レクチャーワークショップ 「ジェンダー目線の広告観察」

日時：2024年8月24日（土）13:30～15:30  
会場：PURPLE  
登壇者：小林美香、山崎恭子  
一般参加者：6名

SNSにあふれる広告が性役割やミソジニーをどう再生産しているかを問うべく、『ジェンダー目線の広告観察』の著者・小林美香氏（写真・ジェンダー表現研究）を招き、レクチャーとワークショップを実施。広告費の推移やステレオタイプの類型を確認した上で、参加者が持ち寄った広告事例を分析した。また質疑応答では広告業界関係者からの質問を切っ掛けに、ステレオタイプと売上、倫理との関係に踏み込んだ議論が展開された。また、生成AIによる身体表象の影響にも触れ、広告が持つメッセージへの批評的視点を養う時間となった。定員を超える申し込みがあり、表象を通してジェンダーを捉える視点への関心の高さがうかがえた。



第1回研究会の様子

### 第2回研究会 | トークイベント 「『ジェンダー・クィア』ってどんな本？」

日時：2024年8月24日（土）17:00～18:30  
会場：PURPLE  
登壇者：小林美香、堀井ヒロツグ、山崎恭子  
一般参加者：23名

2024年9月にサウザンブックス社より出版された『ジェンダー・クィア』を取り上げ、翻訳者の小林美香氏（写真・ジェンダー表現研究）を招いてトークイベントを開催。聞き手は堀井ヒロツグ氏（写真家）と研究代表者の山崎恭子。ノンバイナリー当事者による自伝的コミックという本書の特徴に加え、翻訳の背景やアメリカでの禁書指定などの社会的文脈についても共有された。事前に募集した「推しページ」をもとに、ノンバイナリー当事者の経験や共感を軸としたディスカッションを実施。質疑応答では「ミソジニー」や「交差性」に関する意見が多く挙がり、参加者の問題意識の高さが際立った。

### 第3回研究会 | トークイベント 「舞台芸術関係者に向けたLGBTQ勉強会」

日時：2024年10月14日（月・祝）14:00～17:30  
会場：京都芸術大学  
登壇者：和田華子  
一般参加者：13名

性的マイノリティへの理解を深め、創作現場で欠かせない実践的知識を学ぶために、和田華子氏（青年団俳優）を招いてLGBTQ勉強会を実施。内容は、ジェンダーとセクシュアリティに関する基礎知識、日本における現状、稽古場で起こりやすいアウティングへの対応など。スライドや参考資料を通じて、当事者・非当事者双方にとって安心できる創作環境のあり方を共有した。参加者には舞台関係者に加え、教員や翻訳家なども含まれており、影響力のある層に広がりが見られたものの、一方で必要な層に情報が届きづらい現状も指摘され、継続的な取り組みの重要性が確認された。



第3回研究会の様子

### 第4回研究会 | 研究会 「モーションキャプチャーを使用したジェンダー表象研究会」

日時：2025年3月12日～3月13日  
会場：京都芸術大学  
参加者：藤高和輝、山崎恭子、研究協力者3名  
非公開

アバターを通じた身体とジェンダー表象の関係性を探るために、モーションキャプチャーを用いた実践的リサーチを実施。「アバター＝理念的な男女の身体」と仮定し、現実の身体との相互作用を2日にわたり調査した。1日目は藤高和輝氏（哲学者 京都産業大学准教授）による講義、とくにその著書『ノット・ライク・ディス』の中で紹介されたゲイル・ワイズ（1999）の「身体イメージ理想」を中心にレクチャーして頂き、トランスジェンダーの研究協力者の方々との対話を通じて理解を深めた。2日目は引き続き研究協力者と、アバターを操作する中で身体感覚や心的変化に関する詳細な聞き取りを行った。参加者からは「身体感覚を肯定的に言語化できた」という声もあり、舞台芸術がトランスの視点と接続し得る可能性が確認された。同時に、舞台芸術における観客の視線がもたらす緊張や危うさについての意識も共有された。



第4回研究会の様子

## 研究の総括

本プロジェクトの目的は、演劇的視点から「身体」を複数の他者が交差する場として捉え、二元論の中で棄却された「わたし」の身体を、どのように引き受け／直すことができるのかを問うことであった。成果として、一つのアバターを複数人で操作するという試みを行った。これは、アバター＝規範的な男女の身体形によって生じる抑圧を、異なる背景を持つ他者同士が共有することで、分断された関係性を共闘の契機へと転換する可能性を示すものである。

一方、棄却される身体は性に関わるものだけではない。今後の展望は、棄却された身体の位置付けを広げ、「多頭のヒドラ」（P・ランボー、M・レディガー、2011年）としての身体の可能性を模索したいと考えている。

## 参考文献

- 表現の現場調査団『表現の現場 ジェンダーバランス白書 2022』、2022年。  
URL : <https://www.hyogen-genba.com/gender>
- マイア・コペイプ著、小林美香訳『ジェンダー・クィア』サウザンブックス社、2024年。
- 小林美香『ジェンダー目線の広告観察』現代書館、2023年。
- 藤高和輝『ノット・ライク・ディス』以文社、2024年。
- ピーター・ラインパウ、マーカス・レディガー著、柏木清吾訳『多頭のヒドラ—八世紀における水夫、奴隸、そして大西洋の労働者階級』『現代思想』39(10)、青土社、2011年、32-59頁。

# デラシネ・リゾーム ー在欧日本人アーティストのエクソフォニー感覚について

藤原ちから | orangcosong・アーティスト

本研究プロジェクトは、欧州に長く暮らす日本人アート実践者たちにインタビューし、共に時間を過ごすことで、彼らが持っているであろう「エクソフォニー感覚」(第一言語の言語圏を離れたことで生じる知覚・生活感覚・創作スタイル等の変容)に触れ、彼らのように異郷に暮らすアート実践者たちの存在と活動を、主に日本語圏で暮らす人々に紹介するものである。それは日本に根深く染み付いている「単一民族神話」(「日本人」「日本語」「日本国」をイコールで結びつけ、そこから逸脱する存在やその歴史については想像力を欠いた社会認識)を解きほぐす試みでもある。数量的・統計的な調査や分析を目的とせず、あくまでも個々人の唯一無二のユニークさに着目している。なお、当初は「在欧日本人アーティスト」を対象として想定していたが、キュレーターやプロデューサーなど様々な形でアートに関わる人たちにも取材を行ったため、「アート実践者」へと対象を拡大することとした。

## 研究の出発点

研究代表者である藤原ちからは、2014年にドイツ・マンハイムで開催された世界演劇祭以降、欧州や東アジア、東南アジアの各都市に生活や活動の拠点を置く日本人アート実践者たちに出会ってきた。生まれ育った土地を離れて暮らす彼らの活動が、日本においてほとんど知られていないという知名度の偏差についても違和感を抱いた。また、藤原が2017年にマニラで上演した『港の女 Woman In A Port』はインタビュー取材をもとにしたレクチャー・パフォーマンスだったが、その際に感じた「誰かの物語を作品として観客に見せる際に生じる倫理的困難(他者のアイデンティティや物語を榨取・収奪してしまうことへの危惧等)」は、本研究の調査・発表の方法に大きく影響している。2022年に滞在制作を行った南アフリカ共和国のサバンナに囲まれた町マカンダでは、東アジアから遠く離れ、治安も悪く流通経路もかぎられた土地で、「同胞」たちと身を寄せ合って生きることの大切さを思い知らされました。そうした経験も、「異郷で暮らす」人々へのリスペクトと関心に繋がっている。

## 研究の方法

「異郷で暮らす人々」への関心は「日本人」だけに限るものではないが、2024年度は「欧州」に暮らす「日本人アート実践者」へと対象を絞り込んだ。また、派遣されたりレジデンシーに応募するなどして短期滞在している人々は対象外とし、少なくとも数年間にわたって異郷で暮らしている人々のみにフォーカスしている。2024年4月から7月にかけて欧州に滞在し、奥谷美佳(デザイナー/キプロス共和国・ニコシア)、岩田美美子(コーディネーター/キプロス共和国・ニコシア)、松根充和(ダンサー・振付家・アーティスト/オーストリア・ウィーン)、荒川いづみ(プロデューサー、通訳/イタリア・ミラノ)、濱田陽平(ダンサー・アーティスト/ノルウェー・ボーデ)、篠崎由紀子(ダンサー・振付家・アーティスト/ノルウェー・オスロ、ベルギー・ブリュッセル)、岡本あきこ(キュレーター/ドイツ・デュッセルドルフ)の7名に取材を行った。彼らには事前に研究趣旨を伝

え、自宅やスタジオ等を訪問してインタビューを実施し、共に時間を過ごした。インタビューや共有した時間の一部は映像や音声として記録している。なお、彼らとはその後も日本に一時帰国中に会ったり、オンラインで話したりを続けており、取材は今後も続していく可能性がある。

欧州各都市での滞在中、他にも多くの日本人アート実践者たちと出会ったが、インタビューは、事前にアポイントメントをとった上記の方々のみに依頼した。また、欧州滞在中は日本語で日記を書き、それをウェブプラットフォームの「note」上で公開した。本研究の取材前後の流れもこの日記に含まれている。ただし、プライバシー保護の観点から、記述を控えた部分も多い。

## 暫定的な考察

まずは複雑さを複雑なままに受け止めることが重要であり、取材で得られた言葉や物語から結論を導き出すのは時期尚早である。ここでは、あくまでも現時点までの取材において、暫定的に重要かもしれないと感じたポイントを記すに留めたい。

「移住した理由や経緯」は最も気になるところだが、インタビューにとっては過度に理由付けをしたり物語化したりするのは不本意なことであるのかもしれない、むしろ偶然性を強調するような語りが印象に残った。

「拠点」の持ち方は、ひとつの都市に落ち着いた人、次なる場所を求める人、複数拠点を持つ人など、人それぞれである。シェンゲン圏内では移動がしやすいということもあり、国境を越えて活動することは珍しいものではない。「コラボレーション」の相手も多国籍となる場合が多く、クリエイションの際の使用言語も日本語、英語、現地語など複数となりやすい。

「日本との距離の持ち方」については、今回取材した7人のうち日本にもうまったく帰らないという人はおらず、年に1度程度の頻度で帰国する人が多かった。「いずれ日本に帰りたいか(拠点を移したいか)」という質問については、多くの人が「考えてない」と答えながらも、その答えには收まりきらない複雑なものを感じさせた。

パートナー間でどの言語で話すのかも大事なことだが、特に子供がいる家庭の場合、「家庭内における言語の継承」も重要なイシューとなる。上述したように彼らの活動は国境を越えることもあるため、特定の言語圏内のみで生活する場合とは異なる形で、複数の言語に触れることになるだろう。

## 報告会でのフィードバック

2025年7月にオンラインで開催された報告会(舞台芸術研究センター主催)では、ゲストコメンテーターとして橋本裕介氏(ベルリン芸術祭プログラムディレクター/ドラマトゥルク)からコメントを頂戴した。その後半では、「言語というものにこだわるのかどうか」「移動資本を持つ者、持たざる者についてこの研究はどう考えるのか」「誰と移動・生活するかという点におけるジェンダーの問題」などが指摘された。

言語については、「第一言語／在住地域の言語」というだけでなく、ヘゴモニー言語である英語が活動に及ぼしている影響とその権力性も無視することができない。また、取材対象を「日本人」に限らない場合、旧東西ドイツのように同一文化圏が分断されて越境したケースもあり、「異郷に暮らす」ことが必ずしも言語的な越境を必須とはしていないことも今後は想定ていきたい。

移動資本については、研究ノート(『京都芸術大学舞台芸術研究センター紀要 2024年度』、89-113頁)でも「国境を越えるアート実践者は文化資本を持つという意味ではグローバルエリートではある」と触れたように、アート実践者は基本的には移動資本を持っている存在とみなされやすくなる。しかし出身地域によっては事実上の難民状態に置かれているアート実践者も存在するし、家庭の事情によって移動や活動が意のままにならない者もいる。本研究では、彼らを「資本を持つエリート」と一概にみなすのではなく、個々の置かれている事情や環境を注視ていきたい。

異郷で暮らすにあたって誰と生活を共にするかは最重要的ことであり、その際に発生しうるジェンダーバランスをめぐる問題も軽視できない要素となる。在留資格の取得や子育ての負担をめぐるジェンダー格差の影響にも留意したい。

## 今後の展開

本研究は、展示、上映、上演、出版物といった多様な表現へと発展する可能性を持っている。本研究メンバーが上演を模索しているパフォーマンス作品『IsLand Bar』は、異郷で暮らすアート実践者たちを出演者として想定するなど、本研究との繋がりも強い。また、今後のリサーチは、「日本人」に限定せず、対象地域も広げていく可能性がある。あるいは日本で活動する海外出身のアート実践者にインタビューすることも視野に入れている。いずれにしても、本

研究はライフワーク的に続けていくことになるだろう。

2025年も再び欧州のいくつかの都市を訪れ、日本人も含めて異郷に暮らすアート実践者たちに出会った。彼らと共有する様々な場を通じて、わたし(たち)には見えない時間と空間の存在を感じること。その想像と学びが、ライフワークとしてこの研究を続けていく礎になるとを考えている。

## 活動報告

欧州取材(2024年4月～7月):キプロス共和国(ニコシア)、オーストリア(ウィーン)、イタリア(ミラノ)、スペイン(ビルバオ、マドリード)、オランダ(ユトレヒト)、ノルウェー(オスロ、ボーデ、スタムスン)、ドイツ(デュッセルドルフ、ケルン、ハンブルク)、チェコ共和国(プラハ、ブルゼニ、チェスキー・ブジェヨヴィツェ)

口頭発表:「デラシネ・リゾーム - 異郷に生きるアート実践者たち」(YPAM エクスチェンジ、2024年12月5日)

口頭発表:共同利用・共同研究拠点形成事業「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的共同研究拠点」2024年度「劇場実験型」報告会(2025年7月22日)



## 関連出版物

藤原ちから「【研究ノート】デラシネ・リゾーム異郷に生きるアート実践者たち」『京都芸術大学舞台芸術研究センター紀要 2024年度』京都芸術大学舞台芸術研究センター、2025年、89-113頁。

## 研究組織

研究代表者:藤原ちから(orangcosong)／研究分担者:住吉山実里(orangcosong)／研究協力者:松橋萌(orangcosong)アソシエイトメンバー・東京藝術大学大学院メディア映像専攻)

# 「聴くことから始まるダンス」 ~耳を澄まして悲喜交々に巡る、高解像度なドタバタ 「High-resolution Slapstick」

垣尾優 | ダンサー

本研究は、身体を用いた“共鳴”に至る方法についての研究である。

また、差異と同一について、それらにつながる前提や世界観についての考察である。

研究の方法として、即興ダンスを屋外の各地で実施した。

ここでは、即興ダンスを、“世界に対するリアクション”そのものとして捉え、イメージやテーマなどを表現するという、アクションから始まる方法ではなく、聴く、待つ、思い出すなどのリアクションから始まる方法をダンスマソッドとし共鳴に至る方法とした。このダンスを“聴くことから始まるダンス”と称し、リアクション、チューニング、記憶などをキーワードに、移動し人に出会い踊る、というフィールドワークを行った。また、作品や上演という形式においての考察も行い、このダンスを人に観せることの目的を「観客のチューニング感覚を駆動させること」とし、「今ここに深さが発生すること」、「響きあうことができる現場の発見」を志向した。

## イントロダクション

即興ダンスを踊っていると、“今”に深さを感じる時がある。川をじっとみていると、ずっと動いている奥にシステムが見えるような時がある。このような時の気持ちは、穴のようなひとつのような、ざわざわボツンと落ちていたものである。自分というより自分の芯が、このひとつのが“リアリティ”を救いのように、また“動機”そのもののように感じ、求める。これは、妄想なのか?共鳴なのか?ここが響きあう現場なのか?そのようなことをもっと深く知りたいと思った。

“共鳴”現象とは、音叉を二つ並べ、一方を鳴らすと他方も鳴り始めるという実験でよく知られている。物体の内部の特定の周波数(固有振動数)が外部からの周波数(振動)に合致した時、激しく振動が起こることである。また、量子力学では「あらゆる物体は分子レベルで振動している」とみなされている。これらの前提を用いて、共鳴に至る方法を「すでに世界は振動しているから、それに合わせ(チューニング)こと」として、今回のダンスマソッドの根本として設定した。

そして、身体で試行するための手掛かりとして、“リアクション”=態度、に注目した。“リアクション”には、これを発生させた、対象、出来事、“アクション”がある。もし、リアクションを、アクションより先行させることができれば、アクションは事後に浮かび上がる。もしくは、リアクションが発生した瞬間に同時にアクションが浮かび上がる。このように、“いきなりなリアクション”は、これまで見えなかつた姿、聞こえなかつた声などの、“存在しなかつたアクション”をも浮かび上がらせる。

リアクションから始まるとは、世界に対する解像度を変化させること、または何かを思い出すことではないか。見えないもの聞こえない声などが、実在するかどうかではなく、“リアクションから始まる”ことを、止揚的方法として捉え、“今”に過去と未来を、“ここ”に他所を、混成させることも可能な、また、さらなる一体化につながるための(人間特有の)振る舞い=“態度”とした。

さらに、いつの間にか生まれ気がつけば生きている。という“生きていること”をリアクションとしてとらえる世界観や物語。例えば、運命、因果、前世、輪廻、終末論、擬人化、ドリームタイムなどの世界観。ユダヤ教の始まりの物語やベケットの『ゴドーを待ちなが

ら』、能劇『遊行柳』などの物語など。また、神話学者ジョセフ・キャンペルは、人は聖地を作り出すことによって、動植物を神話化することによって、その土地を自分のものにする、つまり自分の住んでいる土地を靈的な意味のある深い場所に変えるのだ、と述べている。各国の神話民話などでもしばしば見られる、このような物語や世界観は一体何を示唆しているのか?と考えた。

これらは、どのような態度を取れば、他者や世界と響き合うのか、という一体化にまつわる方法を示しているのではないか。これらはいわば、共鳴に至る“態度”的技術論、“今”を納得する方法、または響きあう現場への地図とも捉えられるのではないか。

“共鳴”をキーワードに、生きていることについて、立ち止まって足元から、できるだけクールに身体で思考したいと思った。また、今回の研究にまつわることを体認することが、これからの現状や価値観についての考察となることも期待した。

## 研究活動報告

即興ダンスを各地で行うフィールドワークを、“遊行シリーズ”と称し実践した。およそ60ヶ所の場所に赴き、即興ダンスを行った。過程で、約50人の方と出会い、また6人が同行者として参加した。この行動記録をSNSのnote上にて1年間に渡り公開した。

日常や身体スケールを方針としたフィールドワークとして、自宅から始め、主に徒歩で移動した。移動方法においても、あらかじめ目的地を設定するのではなく、たまたま出会った人に好きな場所や気になる場所などを聞きそこに向かうといった、リアクションに基づく試行錯誤学習という方法で移動し、これを繰り返した。出会った方に即興ダンスを見てもらい、浮かんだ言葉や記憶などを伺いこれも記録した。また、成果上演パフォーマンスとして、対談者二人が言葉を用い互いに聴き合う『しゃべらない対談』なども行った。

## 遊行行程(noteのエピソード番号に対応)

- 1.[源八橋] 大阪市都島区 中野町4丁目15
- 2.[源八橋下の河原] 同上
- 3.[掃除する人] 大阪市北区 天満橋2丁目2-26

- 4.[テニスレッスン] 大阪市都島区 毛馬桜之宮公園
- 5.[河川敷] 同上
- 6.[陶芸教室 plage] 大阪市都島区 中野町4丁目5-6
- 7.[都島南通り公園] 大阪市都島区 都島南通1丁目24-5
- 8.[車輪梅の道] 大阪市都島区 都島南通1丁目23-4
- 9.[ミツエさんと社] 大阪市北区 長柄東2丁目9-80 長柄東公園
- 10.11.[陶芸教室 plage] /6と同じ
- 12.[咲くやこの花館] 大阪市鶴見区 緑地公園2-163 花博記念公園
- 13.14.[毛馬北向き地蔵] 大阪市北区 長柄東
- 15.[旧毛馬闇門] 同上
- 16.[淀川河川公園] 大阪市北区 長柄西地区 長柄西2丁目13
- 17.[フクちゃんのお気に入り釣り場] 大阪市都島区 毛馬
- 18.[藪] 淀川河川公園から大阪市旭区
- 19.[風車の丘] /12と同じ 花博記念公園
- 20.[花博記念公園] 同上
- 21.[北西口] 同上
- 22~26.[旧藤田邸庭園] 大阪市都島区 網島町10
- 27.[太子橋今市] 大阪市旭区 太子橋
- 28.[清水小公園] 大阪市旭区 清水2丁目6
- 29.[北西口] /21と同じ
- 30.31.[毛馬桜之宮公園] 大阪市都島区 網島町10-56
- 32.[神戸市立相楽園] 兵庫県 神戸市中央区 中山手通5-3-1
- 33.[エステサロン clea] 大阪市北区中之島4丁目
- 34.35.[諏訪神社] 神戸市中央区 諏訪山町5-1
- 36.37.[ビーナスブリッジ] 神戸市中央区 神戸港地方口一里山
- 38~41.[大阪北協会][中之島美術館] 大阪市北区 中之島4
- 42.[大阪市役所] 大阪市北区 中之島1丁目
- 43~46.[山本通り公園] 神戸市中央区 山本通り4-4-6
- 47.[ポートタワー] 神戸市中央区 波止場町5-5
- 48~50.[肥後橋][帝国座跡地] 大阪市西区、中央区 北浜
- 51~54.[梅田] 大阪市北区
- 55~57.[万博記念公園] 大阪府 吹田市 千里万博記念公園
- 58.[太陽の塔] 同上
- 59.[彩都西] 大阪府 茨木市 彩都あさぎ1丁目
- 60.[太宰治文学サロン] 東京都 三鷹市下連雀3-16-14

## まとめ

知らない人に話しかけてみると、あいさつする。すると、その人は知った人になり顔が見えてくる。このようななんでもないことの凄さを改めて確認できる機会となった。今回ダンスは、雨宿りにおける雨のように、その“きっかけ”になるだけで、それだけでもう踊っていた。

また、聴く、待つ、思い出す、想像、記憶。それらも物理現象のように即座に現実に作用する世界があることを知った。現実は現実でないものとも混成し蠹いている。この一端を垣間見る機会ともなった。

“響きあうこと”で調和することは、“烈しく落ち着いている運動”である。

現代の多種多様なアリティの中で、落ち着く場所を探した。今回私は、それを横ではなく縦、差異性ではなく同一性の方向へ、“深さ”に求めた。身体はいつも落ち着く場所に向かおうとする。

すでに、世界は動き響き語りかけていている。と設定してみた。前提を変化させると今ここが足元から変わる。“弔う”とは、死者の声に、聞こえないまま、まず耳を傾けることで、“踊る”とは、ただ、ダンサーとして存在すること。このようなムードの中で溢れこぼれ落ちるもの。これを『聴くことから始まるダンス』と名付けた。

## 成果上演パフォーマンス 『しゃべらない対談』(公開)

### 『しゃべらない対談』吉岡洋 × 垣尾優

日時: 2025年3月28日(金) 14:00 ~ 15:00 会場: 京都芸術大学 楽心荘  
対談者: 吉岡洋(京都芸術大学文明哲学研究所所長)  
舞台監督: 大田和司(京都芸術大学舞台芸術研究センター 技術監督・舞台監督)  
コーディネーター: 新里直之(京都芸術大学舞台芸術研究センター 研究職員)  
映像撮影: 金成基  
一般参加者: 約20名

## 関連上演パフォーマンス

### 『しゃべらない対談』山下和也 × 垣尾優

日時: 2025年5月31日(土) 15:00 ~ 16:00 会場: 神戸OAGアートセンター 庭  
対談者: 山下和也(日本画家)  
一般参加者: 約20名



『メビウスの輪』 / 『聴くことから始まるダンス』のメソッドモデル

- ・ねじれ : リアクションから始まる
- ・端と端をつなぎ“輪”にする : チューニング
- ・回転、線 : 全てはすでに動いている。を前提とする
- ・表裏が溶け合う : 韻きあう



『しゃべらない対談』吉岡洋 × 垣尾優 上演記録より

## 研究組織

研究代表者: 垣尾優(ダンサー)

# 共同利用・共同研究拠点連携プロジェクト 疫病・戦争・災害の時代に—サミュエル・ベケット映画祭 2024

早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点との連携プロジェクトとして、「疫病・戦争・災害の時代に—サミュエル・ベケット映画祭 2024」を開催した。京都会場(京都芸術劇場 春秋座)でのオープニングイベントを皮切りに、京都と東京の2会場でトークを交えた上映プログラムを実施したほか、京都会場ではベケットに想を得た現代アーティストの作品集も展示された。各回では20世紀を代表する劇作家であり、誕生と死の間に宙吊りにされた人間を描き続けたサミュエル・ベケット(1906-1989)の作品にちなんだ映像作品を上映し、多様な分野で活躍するゲストを迎えたトークセッションを実施した。それぞれの分野での経験や知見をもとにした意見交換を通して、ベケットの作品世界を深く掘り下げる試みがなされた。

## オープニングイベント(公開)

日時：2024年11月23日(土・祝)14:00～17:00  
会場：京都芸術劇場 春秋座  
トークゲスト：やなぎみわ(美術作家・舞台演出家)、岡室美奈子(早稲田大学文学学術院教授)  
司会：小崎哲哉(京都芸術大学大学院芸術研究科教授・ICA京都『REALKYOTO FORUM』編集長)

小崎哲哉氏によるベケットとその作品、さらに後世への影響についての講演の後、トークセッションが行われた。第一部では、過去にベケット作品をモチーフに創作に取り組んだやなぎみわ氏が登壇し、やなぎ氏が作・演出・美術を手がけた『ゼロ・アワー - 東京ローズ最後のテープ-』(2013年初演作品、上映映像は2015年版)のダイジェスト映像を上映。同作とベケット作品に共通する要素を作り手の視点から議論した。第二部ではベケットを専門とする岡室美奈子氏が加わり、第一部の内容を受けてベケットの思想や表現について深く掘り下げた意見交換がおこなわれた。

## 上映プログラム1

日時：2024年12月7日(土)13:00～18:30  
会場：京都芸術劇場 春秋座  
トークゲスト：森山未來(俳優・ダンサー)  
聞き手：小崎哲哉(京都芸術大学大学院芸術研究科教授ICA・京都『REALKYOTO FORUM』編集長)

『ゴーを待ちながら』(監督：マイケル・リンゼイ=ホッグ、2000年製作)、『ねえ、ジョー』(監督：ミシェル・ミトラニ、1986年製作)、『クラップの最後の録音』(アトム・エゴヤン、2000年製作)の3作品を上映した。合間のゲストトークでは領域横断的に活動する森山未來氏を迎え、森山氏の過去の出演作にも言及しながら、ベケット作品のテーマや感覚を手がかりに表現や思索の対話がおこなわれた。

## 2024年度 研究報告会レポート 一対話による研究の深化と新たな地平ー

本報告会は、ここまで紹介された各研究事業を、「劇場実験型」と「リサーチ支援型」の二部門に分け、司会・進行に宮信明を迎え、改めてその成果を共有・検討する場として開催された。

リサーチ支援型の部では、「デラシネ・リゾーム—在欧日本人アーティストのエクソフォニー感覚について」を藤原ちからが、研究分担

## 上映プログラム2

日時：2024年12月8日(日)13:00～18:30  
会場：京都芸術劇場 春秋座  
トークゲスト：北小路隆志(京都芸術大学芸術学部映画学科教授・映画評論家)  
聞き手：小崎哲哉(京都芸術大学大学院芸術研究科教授・ICA京都『REALKYOTO FORUM』編集長)

『エンドゲーム』(監督：コナー・マクファーソン、2000年製作)、『フィルム』(監督：アラン・シュナイダー、1965年製作)、『ハッピーデイズ』(監督：ジョン=ポール・ルー、1971年製作)を上映し、トークセッションでは北小路隆志氏をゲストに迎え、ベケットが脚本を執筆した唯一の映画作品『フィルム』を起点に、ベケットと映画表現・映画文化をめぐる多角的な視点が示された。

## ベケットの実験的短篇映像 上映&トークのタペ(公開)

日時：2024年12月17日(火)18:30～20:40  
会場：早稲田大学 小野記念講堂  
ゲスト：カゲヤマ気象台(劇作家・演出家・演劇プロジェクトsons wo: 代表)  
七里圭(映画監督・脚本家)  
聞き手：岡室美奈子(早稲田大学文学学術院教授)、小崎哲哉(京都芸術大学大学院芸術研究科教授・ICA京都『REALKYOTO FORUM』編集長)

第一部では『フィルム』(監督：アラン・シュナイダー、1965年製作)とベケット自身が演出したテレビ作品『クワッド』(1981年発表)をはじめとした計5本の短編映像を上映。第二部ではベケット作品にゆかりのある七里圭氏とカゲヤマ気象台氏をゲストに迎え、自身の作品とベケット作品の共通性や、ベケット作品における映画と舞台での表現の違いや身体表現について意見交換が行われた。

者の住吉山実里とともに、これまで重ねてきたリサーチの過程やそこで浮かび上がってきた倫理的葛藤を共有した。これに対して、コメンテーターの橋本裕介は、二つの問い合わせを提示した。一つは、「どのような条件で異郷に来たのか」という背景から見える“移動資本”を持つ者と持たざる者(例えば難民・亡命者)について、もう一つは、

「声を拾う」という行為の先にある、それらの声がなぜこれまで可視化されてこなかったのかという構造自体を問い合わせる視点の重要性である。これらの問い合わせに対して、藤原、住吉山は共に複層的な視点の必要性を共有した。

続いて「聴くことから始まるダンス」～耳を澄まして悲喜交々に巡る、高解像度なドタバタ [High-resolution Slapstick] では、垣尾優の、「共鳴」というキーワードから始まった身体表現の探求が、橋本との対話を通じて「即興の始まり」という根源的問い合わせへと深化していった。とりわけ、互いに拒絶しあうような関係性においても「共鳴」が可能なのかという視点は、従来の肯定的共鳴論を乗り越える理論的視座を提示したといえる。

一方で、山崎恭子の「支配的なイデオロギーへの対抗の場としての身体：ジェンダー・セクシュアリティの視点からの新たな文法創出」では、コメンテーターの丸山美佳が、自らの違和感を起点に他者との対話や実践を取り込んでいく山崎の姿勢に共感を寄せながらも、「規範」という語が内包する多様性に着目する必要を指摘した。たとえば一つの規範的枠組みにも、人種・民族性・地域性といった条件により異なる内実を持ち得ることから、それらが交差する地点に目を向けることで、より深く多層的な分析が可能になるのではないかと提案された。

このリサーチ支援型の部を総括して、拠点代表の河田学は、文学理論の視座から横断的な分析を行った。藤原の扱う「エクソフォニー」という語に見られる越境性の意味、垣尾の「聞くこと」が持つ受容的な感覚と言語化との関係性、山崎のリサーチ起点への再評価など、各研究に通底する問題系を的確に抽出し、リサーチの出発点とその転換点をめぐる問い合わせを投げかけた。

一方、劇場実験型の部では、テクノロジーと身体、都市と辺境、現代美術と舞台芸術が交錯する表現の現在が、次々に提示された。「遠隔通信技術を用いた『瀬戸内の離島』と《都市》同時上演による地方課題の解決、および地方と都市の共創モデルの開発」のEMMAは、遠隔通信技術「窓」がもたらす演出上の「気配の共有」について、コメンテーターの岡田路子と意見を交わした。ノイズキャンセリングを排除した音環境により、豊島側での観客の状況が京都側に届いた一方で、京都側の鑑賞環境の制約から、逆方向の共有が困難であったことを振り返り、今後の観客体験の設計において一体感をどのように担保するかという技術的な課題から、観客の能動性や立ち位置の再検討が行われた。

また、林ケイタの「映像と劇場—多層的幻想空間の探求—プロジェクト・マッピングとパフォーマンス—ジョルジュ・メリエスを起点として」では、新里直之が映像のトリック性が「映像へのプリミティブな驚き」として再機能する可能性に言及しつつ、劇場入りしてからの空間設計や日韓共同制作の経緯、そしてジョルジュ・メリエスの想像力がいかに現在の演出へと具現化されたかの過程にも踏み込み、創作の現場に即した視点からの映像と演劇の接点をめぐる充実した議論となつた。

岡田裕子の「現代アート的思考でメディアアートと演劇をマッチン

グする観客主体型の劇空間の創作」では、平井愛子が、観客の参与が単なる参加にとどまらず、いかにして表現の構成要素として機能するのかという視点から問い合わせを投げかけた。この視点は、現代美術の手法を舞台芸術へ導入する意義を理論的に再考するうえで示唆に富むものであった。

続いて三つの劇場実験型研究を横断する最終ディスカッションを全員で行った。技術的制約と表現の関係、他者性・参与性・共有体験の創出方法などが共通課題として確認された。

最後に本拠点を置く舞台芸術研究センター所長の安藤善隆から語られたのは、これらの研究が単に技術と芸術の交錯ではなく、新たな舞台芸術の探求へと向かっているという確信だった。本報告会でのコメンテーターとの濃密な対話を通じて新たな問い合わせを得た各研究は、今後もリサーチと実践の往復運動のなかで知見をいつそう深化させていくだろう。今後ますます展開が期待される。

※本文中、氏名の敬称は省略しています。

## 開催概要 | リサーチ支援型

日時：2025年7月15日(火)18:00～21:00  
会場：オンライン開催(非公開)

司会進行 | 宮信明(京都芸術大学芸術学部通信教育部芸術教養学科准教授／芸能史・伝統芸能)  
コメンテーター | 安藤善隆(京都芸術大学舞台芸術研究センター所長／同教授)、河田学(京都芸術大学芸術学部文芸表現学科教授／文学理論・記号論)  
ゲスト・コメンテーター | 橋本裕介(ベルリン芸術祭 プログラム・ディレクター／ドラマトゥルク)、丸山美佳(メディア文化・クリア／フェミニズム理論研究者・キュレーター)  
発表者 | 山崎恭子(演出家)、藤原ちから(orangcosong・アーティスト)、住吉山実里(orangcosong・アーティスト)、垣尾優(ダンサー)

## 開催概要 | 劇場実験型

日時：2025年7月22日(火)18:00～21:00  
会場：オンライン開催(非公開)

司会進行 | 宮信明(京都芸術大学芸術学部通信教育部芸術教養学科准教授／芸能史・伝統芸能)  
コメンテーター | 平井愛子(京都芸術大学芸術学部舞台芸術学科教授／演技論)、安藤善隆(京都芸術大学舞台芸術研究センター所長／同教授)、岡田路子(京都芸術大学芸術学部舞台芸術学科専任講師／演劇学)、新里直之(京都芸術大学芸術教養センター専任講師／舞台芸術研究)  
発表者 | EMMA(演出家)、林ケイタ(京都芸術大学芸術環境専攻映像・メディアコンテンツ領域教授／映像デザイン・マッピング)、岡田裕子(現代美術アーティスト／多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科非常勤講師)

## 2024年度 運営組織

### 運営委員長(拠点代表)

河田 学(京都芸術大学芸術学部学部長／同文芸表現学科教授／文学理論・記号論)

### 運営委員

天野 文雄(大阪大学名誉教授／能楽研究)

安藤 善隆(京都芸術大学舞台芸術研究センター所長／同教授)

内野 儀(学習院女子大学国際文化交流学部日本文化学科教授／舞台芸術論・批評)

大田 和司(京都芸術大学舞台芸術研究センター技術監督／舞台監督)

岡田 茜子(京都芸術大学芸術学部舞台芸術学科専任講師／演劇研究)

岡村 恵子(東京都現代美術館学芸員)

小崎 哲哉(京都芸術大学大学院芸術研究科教授／ICA 京都『REAL KYOTO FORUM』編集長)

川村 毅(ティーファクトリー主宰／劇作家・演出家)

北村 明子(信州大学人文学部教授／振付家・ダンサー)

木ノ下 裕一(木ノ下歌舞伎主宰／まつもと市民芸術館芸術監督団団長)

中島 那奈子(ダンス研究・ダンスドラマトゥルク／早稲田大学文学学術院准教授)

長島 確(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授／ドラマトゥルク)

中山 和也(京都芸術大学芸術学部情報デザイン学科／大学院芸術研究科教授／ICA 京都副所長)

平井 愛子(京都芸術大学芸術学部舞台芸術学科教授／演技論・プロデューサー)

星野 太(東京大学大学院総合文化研究科准教授／美学・表象文化論)

宮 信明(京都芸術大学芸術学部通信教育部芸術教養学科准教授／芸能史研究・伝統芸能研究)

森山 直人(多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科教授／演劇批評)

矢野 浩二(京都芸術大学芸術学部キャラクターデザイン学科／マンガ学科教授)

吉野 さつき(愛知大学文学部人文社会学科現代文化コースメディア芸術専攻教授)

### オープンラボラトリー OPEN LABORATORY

アニュアルレポート

vol.12 —2024年度—

2025年12月1日発行

企画：京都芸術大学舞台芸術研究センター

舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点事務局

編集委員：安藤善隆、村上なつか、中間慶子

デザイン：ヴュッター公園デザイン室

カバー写真：京都芸術劇場 春秋座 撮影：田村尚子

学校法人瓜生山学園京都芸術大学

舞台芸術研究センター 舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 TEL: 075-791-9144

\* 本研究拠点は京都芸術大学舞台芸術研究センターが母体となり、

文部科学省「共同利用・共同研究拠点」の認定を受けて2013年度に設置された研究拠点です。

\* 本レポートに記載の所属は、各研究会・イベント・公演等の記録に基づき、日付記載のあるものは開催当時の所属を、  
随筆等については執筆時点の所属を示しています。